

ほおずき病害

モザイク病(ウイルス)

(生態と症状)

- ① 葉に明瞭なモザイク症状や奇形症状、部分的な枯死部が生じる。
- ② トマトモザイクウイルス(ToMV)やたばこマイルドグリーンモザイクウイルス(TMGMV)は感染力が強く、茎葉の接触、管理作業中の汁液感染の他、罹病植物の残さによる土壌伝染、種子伝染する。
- ③ キュウリモザイクウイルス(CMV)は主にアブラムシにより媒介され、汁液伝染もする。

(防除)

- ① 健全な地下茎、種子(乾熱滅菌処理等)を用いて次年度の苗を育成する。
- ② 発病株は発見次第速やかに除去する。
- ③ 汁液感染を防ぐため、発病株に触れた手や器具等で他の株に触れない。
- ④ 栽培終了後は地下茎(残さ)処理を徹底して行う。
- ⑤ アブラムシ防除のため、防虫ネット等の展帳や異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。

斑点細菌病(細菌)

(生態と症状)

- ① 葉に暗緑色の水浸状小斑点を生じる。
- ② 次第に拡大し葉脈によって仕切られたような斑点となり、やがて大型の褐色病斑となる。
- ③ 雨滴にはね上げられた土が下葉に付着することで病原菌に感染する。それ以降は風雨や葉がふれ合うことで伝染する。
- ④ 施設栽培では、雨漏り(ぼた落ち)部分やハウスの両サイドで発生する。

(防除)

- ① 防草シート等により、畝、畝間、通路、施設周辺等を被覆する。
- ② 病原菌は土壌中に残存し次年度の発生源となるため、クロルピクリン等により土壌消毒を行う。
- ③ 発病葉を除去しハウス外で適切に処分する。
- ④ 発生前から薬剤散布を行い予防を徹底する。また発生時は治療効果を持つ薬剤を散布する。

白絹病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① 発生初期は地際の茎が褐変し萎凋症状が現れ、症状が進行すると株は枯死する。
- ② 発生株の株元土壌や地際の茎の表面に白い絹状の菌糸が蔓延し、黄褐色～褐色の菌核を形成する。
- ③ 菌核は土壌中で長期間生存可能なため、次年度の伝染源となる。

(防除)

- ① 作付け前に、軟腐病防除と同時に土壌消毒を行う。
- ② 発病株は速やかに除去し、ハウス外で適切に処分する。

ほおずき病害

軟腐病(細菌)

(生態と症状)

- ① 茎では水浸状の病斑が黒色に軟化腐敗しながら拡大し、株全体が萎凋枯死する。
- ② 葉では基の方に水浸状の病斑が発生し、葉脈に沿って黒色に変色腐敗しながら拡大する。
- ③ 多湿条件で発生しやすい。
- ④ 虫害や管理作業による傷口から侵入し発病するものと考えられる。

(防除)

- ① 作付け前に土壌消毒を行う。
- ② 圃場内の排水をよくする。
- ③ 腐敗株は抜き取り処分する。
- ④ 銅剤及び抗生物質剤による防除を行う。

半身萎凋病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① はじめに下葉が黄化し、やがて株の片側の葉が黄化して下葉から萎れる。
- ② 土壌伝染する病害で、病原菌は微小菌核を形成して土壌中に長期間残存し、伝染源となる。
- ③ 連作した場合や被害残渣を土壌に混入すると発生しやすい。
- ④ 多湿条件で発生しやすい。
- ⑤ 発病圃場で親株育成すると苗は病原菌に侵されている可能性が高い。

(防除)

- ① 連作を避け、被害残渣は集めて処分する。
- ② 作付け前に土壌消毒を行う。
- ③ 圃場内の排水をよくする。

ほおずき虫害

アザミウマ類

(生態)

- ① ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマなど複数種のアザミウマが発生する。
- ② 生育期では芯葉に寄生し、新たに展開する葉にケロイド状の傷を生じさせ、症状がひどい場合は芯が止まり生育不良となる。
- ③ 葉や花に寄生し加害すると、表面にかすり状の傷をつける。
- ④ トマト黄化えそウイルス(TSWV)を媒介し、当該ウイルスはホオズキへの感染が確認されている。

(防除)

- ① ほ場内及びその周辺の雑草・作物残さを適切に処分する。
- ② 施設栽培では防虫ネット等によりほ場内への侵入を防ぐ。
- ③ ほ場内の見回りや粘着シート等による早期発見に努め、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。

ハダニ類

(生態)

- ① ナミハダニ、カンザワハダニが主体である。
- ② 高温時期には増殖が早く、特に高温乾燥状態では増殖率が高くなる。
- ③ 主に葉裏に寄生し、加害部(吸汁部位)は斑点状に色抜けする。

(防除)

- ① 葉裏に多く寄生しているので、葉裏に薬剤がかかるように丁寧に散布する。
- ② 発育ステージによって有効薬剤が異なるので、薬剤の選択に注意する。
- ③ 薬剤抵抗性が発達しやすいため、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。
- ④ 薬剤は花き類登録を参照する。

タバコガ類

(生態)

- ① 幼虫はガクを食害し内部に入り込み実を食害する。
- ② 葉や花を加害することは少ない。
- ③ 成熟した幼虫は土中に潜り蛹になる。

(防除)

- ① 防虫ネットを展帳し成虫の侵入を防止する。
- ② ガク内部に食入すると薬剤がかかりにくく効果が低下するため、若齢幼虫のうちに防除する。
- ③ 早期発見や発生状況の把握のため、県が発表するフェロモントラップ調査(野菜)を活用する。
- ④ 収穫終了後は速やかに残さを処分するとともに、耕起・耕耘および土壌消毒を行う。

ほおずき虫害

チャノホコリダニ

(生態)

- ① 芯葉がさびたような褐色の鮫肌となり、芯止まりとなる。
- ② 被害部を観察すると微小なホコリダニが多数観察される。
- ③ 本虫の卵は白色で表面に多数の小突起があるため、容易に同定できる。
- ④ 体長0.2～0.25mmの微小なダニで、夏期に多発生する。

(防除)

- ① 発生初期に農薬散布する。

カメムシ類

(生態)

- ① 新芽に近い茎の部分に幼虫は集合して寄生する。
- ② 多数寄生すると、夏期に日射が強い日中は新芽が萎れ、生長は抑制される。

(防除)

- ① 発生初期に農薬散布する。
- ④ 薬剤は花き類登録を参照する。

ほおずき（殺菌剤・殺虫剤）

農 薬 名			毒性	適用病害虫						備考 (散布量方法等)
IRAC・FRAC コード	商品名	一般名(成分名)		軟腐病	斑点細菌病	半身萎凋病	チャノホコリダニ	アザミウマ類	タバコガ類	
①	②									
8B		クロピク 80	劇	●						土壌くん蒸
1		トップジンM水和剤	普			●				
24	M01	カスミンボルドー	普	●	●					
31	25	マテリーナ水和剤	普		●					
15		カスケード乳剤	普						●	
		スワルスキー	一					●		花き類登録、施設栽培、放飼
21A		ピラニカEW	劇				●			
34		ファインセーブフロアブル	劇					●		